和歌山県税金による中学３年生英検全員受験の実態

研究員　中西　毅

１　はじめに
２　県下統一テストの点数比較
３　A 高校在籍生徒の中学時英検の受験に関するアンケート調査の分析
４　和歌山県教職員組合による中学校の英語教員に対するアンケート結果の分析
５　中学生英語教員、保護者、生徒からの声
６　まとめと考察
6-1　はじめに
6-2　不確かな数値の元での都道府県での無意味な競争
6-3　英検全員受験はすべての生徒の英語学習の動機付けになるか
6-4　学校教育の外国語教育で英語の運用能力だけをつけるのが正しい方向か
6-5　最後に

1. はじめに

和歌山県が税金で、県内の中学３年生全員に英検を受験させる制度が始まって今年で３年目になる。和歌山県では、2012 年、世界で活躍できる人材を育成しようと、教育委員会内に「国際人育成プロジェクト」を立ち上げた。当初このプロジェクトは、1 千万円程度（平成 24 年度で 1168 万 2 千円）の予算で、英語教員の研修、教材の提供などを行っていた。2013 年 6 月、安倍内閣は「第 2 期教育振興基本計画」を公表し、中学校卒業段階で英検 3 級程度以上、高等学校卒業段階で英検準 2 級程度～2 級程度以上を達成した中高校生の割合を 50%にすること、また、英語教員に求められる英語力の目標を、英検準 1 級（またはＴＯＥＦＬ　ｉＢＴ　80 点，ＴＯＥＩＣ730 点程度以上）とし、達成した英語教員の割合を、中学校では５０％、高等学校では 75%とするという数値目標を示した。それを受け文部科学省は、2015 年度以降「英語教育実施状況調査」を実施し、都道府県ごとに、中学生や高校生および英語教員の英語力が公表することになった。そのような中央の流れに呼応する形で、2015 年以降、和歌山県の国際人育成プロジェクトは、予算を大幅に向上させ（2016 年度予算で約 1 億 9217 万円）、その予算を使って、和歌山県の中学 3 年生全員に無償で 10 月の第 2 回英検を受験させる制度、また、中学校高校の全英語教員には 5 年間のカスケード形式で、TOEICIP テストを受けさせる制度を開始した。（詳しい内容は、「和歌山県国際人育成プロジェクト事業に係る 平成 29 年度中学 3 年生外部検定試験」実施要領 http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/500200/kokusaijin/pdf/29eiken.pdf および「和歌山県英語教育改善プラン」http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1371435_10.pdf を参照）。当初、県は高校生全員に英検 3 級を受験させようとしていたが、教職員組合の反対もあり、受験級は生徒が選択できる制度でスタートした。

県議会で、県会議員からのこの制度についての質問に対して、和歌山県教育委員会教育長は。こう答弁している。「本県の 3 級以上相当の英語力を有すると思われる生徒数の割合が、

昨年度の 31.0%より約 9 ポイント上昇し、39.9%となりました。これは、中学生が英検を目指して、学習目標をもち、意欲的に英語学習に取り組んだ成果であると考えています。」（2016 年 2 月県議会定例会予算特別委員会）。（ちなみに、2017 年度の結果では、和歌山県の 3 級以上相当の英語力を有すると思われる生徒数の割合は 35.6%と少し後退している）。しかし、教育長の答弁とは裏腹に、一高校英語教師である論者には、全員受験前の入学生（2017 年度、高校 3 年生）と全員受験後（2017 年度、高校 1、2 年生）の英語力や英語学習に対する意欲を比較して、大きく変化したという実感はないというのが正直なところである。

本論の目的は、高校入学後すぐに受験する「県下統一テスト」の点数の変異や、2017 年度入学生に対する意識調査の結果や、生徒、保護者、地域、中学校教員らの声を分析し、和歌山県が多額の税金を使っておこなっているこの「中学 3 年生英検全員受験制度」の実態はどうなのか、生徒の学習意欲や英語力向上に貢献しているのかを追求することにある。さらには、「全員に対する一斉強制テスト」という教育手法は、すべての生徒の学習意欲を向上させるのか、また、させないのであれば、対案はどうあるべきかについても考察する。

本論の構成は以下のとおりである。2 節では、「県下統一テスト」の結果を、全員受験前後で、数学とも比較しながら検証する。3 節では、2017 年度入学生の英検の受験状況と合格状況、また、英検全員受験や英語に対する意識を調査するため行った全員アンケートの結果を分析する。4 節では、和歌山県教職員組合が行った中学校の英語教員に対するアンケート結果を分析する。5 節では、全員受験を体験した生徒たち、中学校の英語教員や地域の人々からの英検全員受験に対するいくつかの声を紹介する。そして、最終 6 節で各調査の分析を生徒の学習意欲向上の対案も含めながら考察を行う。

2. 県下統一テストの点数比較

和歌山県の公立高校では、入学後すぐ、和歌山県高等学校教育研究会英語部会および和歌山県高等学校教育研究会数学部会が作成した県下統一テストが実施されている。統一テストの内容は、英語、数学ともに、中学校 3 年間の基本的な学習内容の定着をはかる内容である。また、両教科とも、年度により難易度に差が出ないように出題内容を配慮している。英語に関しては、文法や長文読解力、語彙力を問う問題が中心になっている。リスニングテストも行われているが、後に述べる A 高校では実施していない。

和歌山県内にある和歌山県立 A 高校においても、2 教科の統一テストが毎年行われている。ここで、A 高校の概況を述べる。当高校は 1 学年 10 クラスの専門高校である。従来「勉強が苦手な生徒が、自分の学力の低さから仕方なく選んでくる高校」であった。しかし、近年、大学や専門学校の学費の高騰、大学生の就職率悪化の流れの中、クラブ活動が活発であり、地元の優良企業への就職の道も大きく開かれている A 高校に入学してくる生徒の様子が変わってきた。一言で言うと、入学してくる生徒の学習意欲、学力とも徐々に向上している。

以下は A 高校における、ここ 3 年間の英語と数学の県下統一テストの点数の平均点である。なお、2016 年度の英語だけは 10 クラス中、7 クラスの平均点であり、それ以外はすべて 10 クラスの平均点である。

	英語	数学
2015 年	42.3	47.2
2016 年	41.9	54.8
2017 年	45.6	48.3

表 1　A 高校における統一テスト点数の変異

2016 年度以降の入学生が、中学校 3 年時に、英検全員受験を体験している生徒である。基礎的な内容を問うテストの平均点が、50 点前後というのは決して高い点数ではない。他の進学校においては、これらのテストの平均点は 90 点近い。それはさておき、英語の結果を見ると、2016 年度に少し下がっていて、2017 年度はあがっているが、数学の結果をみると年により少しずつ上下があり、この結果だけをみれば、英検全員受験後、生徒の英語の成績だけが大きく向上したとはいいがたい。何より、県内において、中程度のレベルにある A 高校の生徒が、中学 3 年生の基礎的な英語力を問う問題で、平均点が 50 点をきっているという 1 点だけみても、英検全員受験制度が、県内すべての中学生の英語力をアップすることに役立っていないことは明確である。

3. A 高校在籍生徒の中学時英検の受験に関するアンケート調査の分析

論者は、A 高校の 2017 年度入学生において、中学時の英検の受験・合格状況と英検全員受験や英語に対する意識を明らかにするため、A高校の英語科の先生方に協力をお願いして 1 学年 10 クラスの生徒全員に対して、以下のアンケートを実施した。

中学3年のときに受けた英検についてのアンケート

（　　）科　1年（　　）組（　　）番　氏名（　　）

このアンケートは英語科教諭中西が、英語教育における強制や検定試験が生徒の英語力や英語に対する愛着にどう影響するかを研究するため、和歌山県の「英検全員受験」のよかったところ、わるかったところを検証するために行っているものです。研究の趣旨をご理解いただきご協力いただければ幸いです。また、氏名を記入していただくのは、もっと詳しく話を聞きたい場合や英検の受験を勧めるためです。それ以外の目的には使用しませんので、ご安心ください。

1　あなたは英語が得意ですか？　（はい　いいえ　ふつう）

2　あなたは英語が好きですか？　（はい　いいえ　ふつう）

3　いままで英会話教室に通ったことがありますか？　（はい　いいえ）

4　はいの人、いつからいつまで通っていましたか？

5　中学校のとき塾に通っていましたか？　（はい　いいえ）

6　中3で受験する前に英検をすでに受験したことがありましたか？　（はい　いいえ）

7　はいの人、何級をうけて結果はどうでしたか？

8　中3のとき受けた級は？　（2級　準2級　3級　4級　5級）

9　受験結果は？　（合格　不合格　1次試験のみ合格）

10　受験級はどうやって決めましたか？

（自分で決めた　保護者が決めた　先生がきめた　その他（　））

11　2次試験を受けた人、どうやって2次試験の会場にいきましたか。

12　英検を無料で受験できたことについてどう思いますか？　（よかった　わるかった　よくわからない）

13　英検を全員で受験したことについてどう思いますか？　（よかった　わるかった　よくわからない）

14　英検を強制受験したことについてどう思うますか？　（よかった　わるかった　よくわからない）

15　英検をうけたおかげで英語に対する興味は増えましたか？　（はい　いいえ　よくわからない）

16　英検をうけたおかげで英語の力がついたと思いますか？　（はい　いいえ　よくわからない）

17　これから先英検にまたチャレンジしたいと思いますか？　（はい　いいえ　よくわからない）

18　英検を全員で受験した際、何か気になったことや、覚えていることはありませんか。あったら自由にかいてください。

19　その他、中学生3年生が全員無料で英検を受ける制度について思うことを書いてください。

表 2　2017 年度入学生むけ「中学 3 年生のときに受けた英検についてのアンケート」（2017 年 4 月実施）

その結果、A 高校に入学してきた生徒が中学 3 年生時に体験した、税金による英検全員受験で、受験した級と、合否結果が明らかになった（表 3）。

	3 級	4 級	5 級
受験者数	211 人	115 人	24 人
合格者数	17 人	65 人	15 人
それぞれの級の合格率	8%	57%	63%

表 3　A 高校 2017 年度入学生中学時代受験した英検の級と合格率(n=384)

表 3 において、明らかなとおり、英検 3 級を受験した生徒は全体の 60%程度であり、英検 3 級を合格した生徒はわずか 8%しかない。つまり、3 級を所得した生徒は、全体の 5%弱にとどまっている。国や県が目指している「50%」からは程遠い。また、英検 4 級・5 級においても合格率はほぼ 6 割にとどまっている。（なお、2016 年、2017 年とも、準 2 級を受験した生徒もごく少数存在する。また、英検受験日当日欠席した生徒や、市町村立中学校以外の中学校出身のため、受験しなかった生徒もいる。また、3 級受験者においては、1 次試験のみ合格した生徒は数に入れていない）。

以下の表 4 は、A 高校、2016 年度入学生の結果である。

	3 級	4 級	5 級
受験者数	137 人	59 人	31 人
合格者数	32 人	35 人	26 人
それぞれの級の合格率	23%	59%	84%

表 4　A 高校 2016 年度入学生中学時代受験した英検の級と合格率(n=240)

2016 年度は、英検全員受験制度初年度の生徒たちである。2017 年度が 1 学年 10 クラス全員の調査であったが、2016 年度は、10 クラス中 7 クラスの集計結果であり、分母は違うことを断っておく。両年度を比較すると、合格率でいうと 2017 年度入学生よりも高い数値となっている。(理由は不明だ)。ただ、いずれにせよ、A 高校に入学してくる生徒に限っていえば、税金を使って半数以上の不合格者を出しているというのは、本当に有意義な制度であるかは大きな疑問である。

続いて、生徒たちの英語や英検全員受験に対する意識を分析する。

	はい	いいえ	どちらでもない
英語は得意ですか？	25 人	243 人	116 人
英語は好きですか？	56 人	166 人	161 人

表 5　A 高校 2017 年度入学生英語に関する意識調査(2017 年 4 月実施)(n=384)

また、以下は 2016 年度入学生の結果である。

	はい	いいえ	どちらでもない
英語は得意ですか？	13 人	155 人	73 人

表 6　A 高校 2016 年度入学生英語に関する意識調査(2017 年 3 月実施)(n=241)

高校は県内の高校の学力レベルでいえば中くらいに位置する。その高校で、英語が苦手だと思っている生徒が 6 割を超えているというのは、英検全員受験は学力が平均的な生徒にとって英語力の自信獲得にはつながっていないことをあらわしているといえよう。さらに、ほぼ半数の生徒が英語を嫌いだと思っていることからも、英検全員受験が生徒の意欲向上に役立っているとはいえないといっていいだろう。

表 7 は、中 3 時の英検の合否結果と、生徒の英語力の自信の関連を調べた表である。

2017		はい	いいえ	どちらでもない
英語は得意ですか？	英検合格者 (98 人)	9%	60%	31%
	英検不合格者 (273 人)	5%	65%	30%
英語は好きですか？	英検合格者 (98 人)	15%	37%	48%
	英検不合格者 (273 人)	14%	46%	40%

表 7　A 高校 2017 年度入学生英検合否別の英語に関する意識(2017 年 4 月実施)(n=371)

この結果から言えることは、英検の合否は、英語に対する興味には大きく影響は与えていないが、英語学力に対する自信には、影響を与えていることが示唆できるということである。あきらかに、不合格者のほうが「自分は英語が不得意である」と感じている。
表 8 は、英検 3 級受験者にかぎって調べた結果である。

2017		はい	いいえ	どちらでもない
英語は得意ですか？	3 級合格者 (17 人)	12%	18%	71%
	3 級不合格者 (194 人)	6%	57%	37%
英語は好きです	3 級合格者 (17 人)	29%	18%	53%

か？	3 級不合格者（194 人）	19%	38%	44%

表 8　A 高校 2017 年度入学生英検 3 級受験者合否別の英語に関する意識(2017 年 4 月実施)(n=211)

表 7 と比較して、英検 3 級受験者に限って言うならば、英語力に対する自信、英語に対する興味とも、合格者と不合格者の間で大きな差があることがわかる。英検 3 級が不合格した生徒の中で、英語が得意でないと思っている生徒が 6 割、英語が嫌いな生徒が 4 割近くもいる。英検の受験結果だけで論議を進めるのは危険だが、3 級で不合格をした多くの生徒にとって、英検受験は、望ましい体験でなかったことが伺える。では、生徒たちは、自分の受験級をどうやってきめたのだろうか？表 9 はその結果である。

	はい	いいえ
受験級を決めたのは自分ですか？	２７％	７3％

表 9　A 高校 2017 年度入学生受験級をきめたのは誰か？（2017 年 4 月実施)(n=367)

表 9 から、7 割以上の生徒は自分で受験級をえらばず、学校や親や学校の教員、塾の先生の指示で受験級をきめたことがわかる。つまり、多くの生徒は、英検受験制度が、合格を目標に設定することで、自主的な英語学習を促進する有効な機会であるとは考えておらず、行事として「こなす」だけのものになっているということである。

続いて、生徒自身はこの税金による英検全員受験制度をどうとらえていたかの意識調査の結果が表 10 である。

	よかった	悪かった	わからない
無料受験はどうでしたか？	62%	4%	34%
全員受験はどうでしたか？	54%	6%	40%
強制受験はどうでしたか？	37%	20%	43%

表 10　A 高校 2017 年度入学生税金による英検受験に対する意識調査（2017 年 4 月実施)(n=377)

この結果を見ると、生徒たち自身は、この制度を無料で全員が受けることに関しては、特に問題だとは思っていなかったようである。ただ、強制的に受験させられたことに対して不満を持っていた生徒が多いことがわかる。

表 11 は 2017 年度入学生の「英検全員受験により、自分の英語力や意識がどう変わったか」の調査結果であり、表 13 は 2016 年度入学生の結果である。

2017	はい	いいえ	わからない

英検受験で英語に対する興味がふえましたか？	13%	57%	29%
英検受験で英語力がついたと思いますか？	17%	55%	28%
英検をまた受けたいですか？	25%	46%	29%

表 11　A 高校 2017 年度入学生税金による英検受験後の意識変化（2017 年 4 月実施)(n=377)

2016	はい	いいえ	わからない
英検受験で英語に対する興味がふえましたか？	14%	56%	30%
英検受験で英語力がついたと思いますか？	17%	50%	33%
英検をまた受けたいですか？	24%	45%	30%

表 12　A 高校 2016 年度入学生税金による英検受験後の意識変化（2017 年 3 月実施)(n=240)

どちらの年度もほぼ同じ結果であり、半数以上の生徒は英検全員受験のおかげで「英語がすきになった」や「英語力が向上した」とは感じていないことがわかる。ただ、英検をもう一度チャレンジしてみたいという生徒は約 4 分の 1 もいる。言い方は悪いが、税金で中学 3 年生に英検を無償で受験させた結果、英語力や意識の向上にはほとんどつながらなかったが、英検をまた受験したいという生徒が増えることで、英語検定協会の利益向上にはつながっているといえる。ここで再び、英検 3 級受験者に焦点をあけ、合格者と不合格者の間の意識の差を見てみる。

2017		よかった	悪かった	わからない
無料受験はどうでしたか？	3 級合格者（17 人）	94%	0%	6%
	3 級不合格者（194 人）	64%	2%	34%
全員受験はどうでしたか？	3 級合格者（17 人）	88%	6%	6%
	3 級不合格者（194 人）	53%	5%	42%
強制受験はどうでしたか？	3 級合格者（17 人）	71%	0%	29%
	3 級不合格者（194 人）	40%	19%	41%

英検受験で英語に対する興味がふえましたか？	3 級合格者（17 人）	41%	12%	47%
	3 級不合格者（194 人）	13%	59%	29%
英検受験で英語力がついたと思いますか？	3 級合格者（17 人）	47%	18%	35%
	3 級不合格者（194 人）	16%	55%	29%
英検をまた受けたいですか？	3 級合格者（17 人）	53%	0%	47%
	3 級不合格者（194 人）	28%	41%	32%

表 13　A 高校 2017 年度入学生税金による英検 3 級受験者の合格者不合格者間の意識比較（2017 年 4 月実施）

合格者の人数が少ないので、簡単な比較はできない。しかし、この結果から、合格した生徒にとっては、7 割以上の生徒が、無料で全員で強制的に受験できたことに肯定的であり、さらに、半数近い生徒が、受験の結果英語力もあがり、英語に対する興味もふえ、さらに再度チャレンジしたいと答えている。当たり前といえば当たり前であるが、合格した生徒にとっては、この制度は非常によい制度となっている。しかし、不合格であった生徒の大多数にとっては、この制度が、自分の英語力や学習意欲の向上にはつながらなかったと考えているという結果が出ている。多額の税金を投与して行っているプロジェクトであるならば、中学生全体から見れば少数である、英語が得意である生徒にだけ自信をつける制度になっているのはおかしいといわざるを得ない。英検を無償で全員に受けさせることが、英語能力や学習意欲の上下に関係なく、県内すべての生徒に例外なく恩恵が与えられる制度になっていない、言い換えれば、税金が適切に使用されていないことは、表 13 の結果だけ見ても、明白である。

最後に、アンケートの自由記述欄を分析する。自由記述欄には、209 名の生徒が回答していた。賛同意見、反対意見の内訳と、それぞれの特徴的な意見を示したのが表 14 である。

賛成意見　158 ・無料なのがよい　・チャンスができる　・モチベーションがあがる　・自分のレベルがわかる　・高校入試にとって有利な内申点になる　・いい経験になる 反対意見　51 ・やりたい人だけがやればいい　・合否結果がクラスメートに見えみえ　・自信をなくす ・マークシートで本当に力がわかるのか？　・人にやらされてやるものじゃない。 ・税金の無駄

表 14　A 高校 2017 年度入学生むけ「中学 3 年生のときに受けた英検についてのアンケート」（2017 年 4 月実施）自由記述欄の分析

論者がひっかかったのは、賛成意見の「高校入試にとって有利になる」というコメントである。和歌山県で、A 高校を受験するような学力が中レベルの生徒の大多数は県立高校への受験を希望する。税金を使った英検全員受験の効果を、公立中学校の生徒が、県立の高校へ入学するのに役立ったといっているのは、いったいどういう意味があるのだろうか？税金を使った英検受験が、主体性や積極性、チャレンジ精神をもつ「世界で活躍するグローバル人材」育成のための英語力を伸ばすためという目標からみると、きわめて些少な感想に思える。思想家の神戸女学院大学名誉教授内田樹氏は、立教大学名誉教授鳥飼玖美子氏との対談において、外部検定試験がランク付けに使われている英語教育を憂えてこういう言葉を残している。

「達成目標と報奨をあらかじめ示した場合、人間は最小限の努力でその目標を達成する方法を必ず考える」（内田、鳥飼、2014、p119）

英検 3 級を合格すれば、内申点評価があがり、高校受験が有利になる。こういう考え方は、内田氏の懸念そのもののではないか。人間が生涯をかけて学びとるべきことは無限である。可視化された目標を立てれば、実現までは努力するが、目標を達成した以降も同じ動機で学びつづけるだろうか。内田氏は、そんな学びでは「学力は必ず落ちる」（前掲書,p119）と警告している。さらに、内田氏は別の著書（内田、2008）で、「この授業をとればこんな力がつくというシラバスに縛られた学問はおかしい。それは、適切な出資で適切な配当を期待しようとするビジネスマインドに汚された考え方だ、真の学問の世界は、生徒を上から見下ろしてシラバスをたてようとしている教員のはるか向こうに広がっている」（論者要約）と訴えている。進路実現や進級といった具体的な「報酬」に縛られる学習では、「予想不能な未来社会において、主体的に学ぶ人材の育成」など絵に描いた餅ではないか。これについては、最終の 6 節で、「動機付け」を大きなテーマにおいた上で、対案も含め、再度考察する。

4 和歌山県教職員組合による中学校の英語教員に対するアンケート結果の分析

和歌山県教職員組合では、中学生に対する英検全員受験が始まった 2015 年と翌 2016 年度に、県内各公立中学校の英語科主任教員に対して、意識調査を行っている。本節においては、その結果を要約して示す。

表 15 は、2015 年に実施した県内 38 校の中学校英語科主任からの意識調査の結果である。

	はい	いいえ	不明
受けたくない生徒に無理やり受験させたケースはあったか？	12 校	8 校	19 校

表 15　和歌山県内中学校英語科主任向けアンケート(県内 38 校が回答)から。受験を拒もうとした生徒の有無(2015).

2015 年度は、初めての実施ということもあり、生徒にとって大きな戸惑いがあったことが推測される。付随した自由記述欄には、英語が苦手な生徒から「どうしてもうけなあかんの？」という質問がでたという記述があった。現場では、そのような生徒をなだめて強制的に受験させた様子が伺える。

英検全員受験のもうひとつ重大な側面は、ただでさえ多忙である中学校教員にプラスアルファの仕事を加えたことにある。表 16 は、「英検全員受験にともないどんな業務が増えたか」の 2015、2016 の回答結果である。(選択肢による回答、複数回答可)。

	2015	2016
保護者への説明	13 人	7 人
準備の会議や計画	28 人	18 人
当日や事後処理	35 人	15 人
2 次試験の引率など	11 人	10 人

表 16　和歌山県内中学校英語科主任向けアンケートから。受験に伴って増えた業務(2015 は 38 校、2016 は 17 校が回答).

保護者向けの説明や、解答用紙のとりまとめや送付、全員が同じ級を受けないことで、会場を複数用意しなければいけなかったり、受験時間がちがったり、様々な手間があったことがうかがえる。また、県は基本的には、2 次試験への引率は、各家庭が行うように言っているが、山間部で会場が遠い場合や生徒の家庭状況に応じて、各中学校の教員が行った場合もあったことがわかる。そして、表 16 にでていない大きな業務がある。それは受験する生徒への「英検対策指導」である。表 17 は 2015 年の回答結果である。

行った	26 校
行う予定だ	9 校
行わなかった	9 校

表 17　2015 和歌山県内中学校英語科主任向けアンケートから。英検対策指導の有無についての回答。(38 校が回答).

この調査は、1 次試験実施後、2 次試験実施前にとられた調査である。この調査からは出てこないが、そのような「対策指導」は、授業時間内に行われたのか、授業時間外に行

われたのかは明らかにはなっていない。英検の出題内容と中学校の指導要領の間にはギャップがある中で、現場の中学校教員が、目の前の生徒たちに「不合格」という悲しみを与えたくないため苦労した様子が目に浮かぶ。2016 年度のアンケートでは、1 次試験対策と 2 次試験対策にわけて質問を行っている。その結果が表 18 である。

	行った	行わなかった
1 次試験対策指導	11 校	7 校
2 次試験対策指導	15 校	2 校

表 18　2016 和歌山県内中学校英語科主任向けアンケートから。英検対策指導の有無についての回答。(17 校が回答).

また、表 19 は、それぞれ何時間、対策学習を行ったかの 2016 年の調査結果である。

◆1 次試験

	0 時間	授業で 1 時間	放課後 30 分	放課後 1 時間	放課後 2 時間	放課後 3 時間	放課後 7 時間
事前の「テスト対策学習」	7	3	1	3	1	2	1

◆2 次試験

	0 時間	放課後 30 分	放課後 1 時間	放課後 2 時間	放課後 3 時間	放課後 4 時間	放課後 5 時間
事前の「テスト対策学習」	2	1	2	7	1	1	3

表 19　2016 和歌山県内中学校英語科主任向けアンケートから。テスト対策学習実施時間調べ(17 校が回答).

対策指導としては、2 次試験のほうが大変であったことは想像に難くない。一人一人をよんで、部屋の入り方から受け答えまで、緊張する生徒をほぐしながら、きめの細かい指導を行ったであろう。もちろん、困っている生徒や目標を達成しようとする生徒を支援するのは、教員の性であろう。ましてや、生徒が個人の責任で受験するのでなく、学校で全員が受験する体制だからこそ、試験当日だけではなく、保護者対応やクラブ指導、不登校生徒の対応などで、帰宅時間が夜中 12 時を超えることも珍しくない中学校の先生方にさらなる負担をかけていることは間違いない。

さて、英検全員受験は、各中学校を準会場にして金曜日に開催されている。制度上、学校が準会場になる場合に限り、英語教育検定協会は金曜日の実施を認めている。以下は、では、各中学校が金曜日の「いつ」英検受験を行ったかの 2016 年の調査結果である。

	3 時間目	5･6 時間目	6 時間目	6･7 時間目	放課後
英検実施時間	1	10	3	1	2

表 20　2016 和歌山県内中学校英語科主任向けアンケートから。英検の実施時間。(17 校が回答).

ほとんどの学校が授業時間内に行っている。中学校 3 年生の 10 月といえば、高校受験に向けて、授業時数がほしいときなのではないだろうか？かといって、放課後実施するのは、先生方のクラブ指導もあり、難しいし、帰宅時間が遅くなるという判断なのだろう。県教委が、シラバス通り授業が行われているかなど指導を強めている一方で、貴重な授業時数を削って、授業時間内に「外部の営利団体の検定試験」を行うのは、果たして教育政策上問題はないのだろうか？

また、アンケートの中で、日本英語検定協会が行っている IBA（自分に適した受験級を決める材料となる団体テスト）を 1・2 年生で実施している学校も出てきたようである。その結果が表 21 である。

	実施せず	実施
英検IBA	6	11

表 21　2016 和歌山県内中学校英語科主任向けアンケートから。1・2 年生向けに IBA を実施したかどうか。(17 校が回答).

オプションである、IBA を受験する中学校が半数を超えている。

自由記述欄の回答からは、中学校の先生方がキャッチした、生徒や保護者の様子の具体的な様子がわかる。ここでは、その中の特徴的なものを紹介する。表 22 は 2015 年、表 23 は 2016 年のアンケート結果からの抜粋である。

「生徒の様子」
・「受けなければならないのか。」と言う声が多く聞かれた。
・本人のレベルに合った級を受けるのが望ましいが、中 3 というプライドがあり、選択が難しい生徒がいた。
・英検受験経験者からはさらに上の級を受けたいという期待の声もあった。その一方で、大半の生徒は未知のことなので、不安を訴える者もいた。特に 3 級以上に適用される面接に対し、未経験がゆえの不安を感じていた。また、本人の適正な受験級が分からないでいた。
・なぜ、私たちだけ（3 年生だけ）受けなければならないの？1 週間後に定期テストあるやん！！
・リスニングが始まる前にすべてマークをぬりつぶして終わっている生徒がいた。
・初めて受ける生徒が多いので、何級を受けたらいいのか分からない生徒がほとんどだ

った。なので全員に4級をさせてその点数やできから自分で判断してもらうようにした。なので受験級を選ばせるのは時間が、手間がけっこうかかります。当日も4年生全員と1・2年の希望者が一緒に受けるのでややこしい点があります。
・受験料を払ってもらえるということでもともと受験する意思のあった生徒はラッキーと思ったようです。ただ英語が苦手な生徒は「ぜったい受けんなんの？」という声もありました。
・「どの級を受けても不合格だから3級を受ける」「4級・5級に合格しても意味がない」等の反応があった。2級・準2級・3級は意欲的に取り組んでいたが4級・5級の自習時間がいらないという声があった。
・え～何ですんの？という英語を苦手とする生徒の声が…多くの生徒はへえ、そんなんするんや！という受け入れの姿勢
・受験級の選択には英検の模試をやってみて自分で選択をさせました。担任の先生に色々な負担をかけてしまうことになったので申し訳なく思います。
・定期試験3日目の午後から実施したので、対策に苦労していました。
・今回の事業費を他のことに使ってほしいという声があったようです。
・3級をがんばって受けようとしていた。ただごく一部は受けただけであった。
・「受けたくない」という声が多かった。特に準2級を受ける子は、勉強不足ということもありそういう声が多く聞かれた。一方で、受けるからには合格したいと本を買ったりプリントをもらいに来る生徒もいた。
・不合格になった際、恥ずかしい。無料だったら受けても良い。
・落ちるのが嫌で、3級でもチャレンジできるような子が4級をうける。
・テストが続くのがしんどい。（期末、英検、実テ）
・大多数の生徒は受験に対して3級は難しくて、合格できないとあきらめている様子であった。低学力生徒も周りの目を気にして3級を受験した生徒もいた。
「保護者からの声」
・無料なのはうれしいが、英語が苦手な生徒に受験させるのにどんなメリットがあるのか。
・やはり学校で練習をさせてくれとか対策をしてくれという要望。英語が苦手な子にすべて受けさせるのはおかしいという声も5月の家庭訪問の時にあった
・「全員受けなあかんの～？」等あまり質問が多く批判的な意見はなかった。
・やはり不合格より合格の方がいいんですよネ！？4級合格ってねうち（正確なことばを忘れた）あります？内申書への記載についてのことばだと思います。多くの方からは特になし
・費用が必要なかったので、喜びと驚きの声が多くありました。

表 22　2015 和歌山県内中学校英語科主任向けアンケートから。保護者、生徒の様子(38 校が回答).

・英語に対して苦手意識を持っていた生徒も合格し（4級）、今後の意欲につながったようです
・[保護者からは]何のために行っているのか伝わらず、あまり意味がないのでは？との

意見が出ました。
・どうして 4･5 級は不合格でもスピーキングテストを受けるべきなのか。
・合格できなかった生徒はやはり残念そうでした。「お母さんに怒られる…」と言っていた生徒もいたと担任の先生から聞きました。ただ、家庭学習を自分でできるよう指導しましたが多くの生徒は積極的に取り組まなかったようです。
・英語が苦手で、5 級を受けるという生徒は欠席した生徒も多くいた（元々欠席が多い)。3 級を受ける生徒の中には、家庭で熱心に対策をしたという生徒も一部いた。保護者は無料でこういった機会があり、肯定的な意見が多かったように思う。

表 23　2016 和歌山県内中学校英語科主任向けアンケートから。保護者、生徒の様子(17 校が回答).[　　]は論者による補足。

特に導入年度の現場の混乱が伝わる。しかし、2 年目を迎えても、苦手な生徒の「なぜ？」は消えていない。「高校教育で行われている外国語教育の目的は、特定の外国語の運用能力をつけることだけでいいのか？」（鳥飼ほか、2017 など）「英語力は、グローバル人材にとって本当に必要な資質なのか？」（斎藤ほか 2016 など)。各方面の多くの研究者が疑問を呈する中、国が定める教育基本振興基本計画に疑念をもたず盲目的に追随し、県が打ち出した「英検全員受験」をトップダウンに導入しても、理念は伝わらず、現場の混乱だけを招いている風にしか見えない。

最後に、中学校の先生方が、この「税金による英検全員受験制度」をどうとらえているかの量的検査と、自由記述欄を以下に示す。

	2015	2016
ア、今後も続けるべきだ	1	0
イ、希望者のみの実施にすべきだ	35	15
ウ、その他	2	3

表 24　和歌山県内中学校英語科主任向けアンケートから。英検全員受験は、今後、どうあるべきか？の回答結果（2015 は 38 校、2016 は 17 校が回答).

・全員受験はやめて下さい。
・学校から、合格、不合格の結果を伝えるのはどうかと思います。
・結果が 11 月に返却されます。5 級を受検して不合格の子が出た時などの反応が気になります。もう一度 11 月過ぎにも声を聞いてもらえればいいと思います。
・やはり、それぞれ得意、不得意があると思います。また、受験を控えている 3 年生にとって負担になるし、“不合格”を経験すると受験への意欲にも影響するのではないかと思います。

・学校がするものではない
・合否の結果が、生徒間で明らかになってしまうような試験を全員に強制受験させるのはおかしい！！教育的ではない！！
・学校の授業の内容と関係ないから希望者だけでよい。今回 5 級から 2 級まで 5 種類のテストがあったのでクラス割けがたいへんであった。1 種類にするとよいと思う。
・受験料が不要という点では全員に実施するのも可と思う。
・今回の結果を見て、有功活用できるといいと思います。
・全員しっかいで受験させるのではなく、あくまでも希望する生徒に受けさせる様にするべきだと思う。
・多額の予算を払い、受けたくない子にも無理やり受験させるより、希望者のみ無料で受けられるようにさせて欲しい。
・イ少人数のクラスで自分の英語力を考え仲間と違う級を受験したが、放課後の勉強で、一人になり泣いてしまった女子一名。従来の自己負担の受験であれば、こういうことはなかったと思う。害でしかない。
・二次試験が遠い場所（バスか保護者の自家用車か）
・二次試験で個人写真が必要（旧市内なら、カメラ屋もあるが、学校で対応した）
・1・2 年対象の英検 IBA がより負担である

表 25　2015 和歌山県内中学校英語科主任向けアンケートから。英語科教員、自由記述欄から（38 校が回答).

・生年月日や年令、住所の記ミスがないか確かめるのが大変だった。全員だと人数が多くなるので手間がかかった。他教科の先生に負担をしいるのが心苦しい。
・本当に余計な仕事をさせられている気がします。
・5 級を選択させたが、選択の仕方。
・全員受験だったので、部屋、監督、級別のテストなど、準備が本当に大変。
・生徒のモチベーションを上げること。英検に不合格だった子の精神的ケア。
・今年度、4 級 5 級でもスピーキングテストがあり合否に関係なく受けさせるということであった。ネットを使っての受験で大変手間がかかった。
・中間テストの 1 週間前、新人大会の前日だったので、上の級をうける 2 年生がクラブに来られなかった。
・新人大会の前日なので、放課後に実施できなく、（クラブ時間の確保のため）5-6 時間目に実施した。
・当日ではないが、前後にたくさんの行事が入っている（生徒が参加する地域行事）
・受けたくない生徒に強制してまで受けさせる必要はない。税金のムダである。
・全然受けたくない子もいて、適当にマークシートをぬりつぶしていた子が多かった。
・学校としての取組みではなく、以前同様、希望者のみ放課後受験をするべきではないかと思います。全員受験は生徒への精神的負担が大きいと思います。
・良い面と、配慮すべき面（悪い面）があるように思うので、はっきりした態度を示せない。
・自分では希望しない生徒にもチャンスが与えられているのはいいが、今後合格率など

競うことのないようにしてもらいたい。 ・希望者のみ無料にする ・事前の作業が多すぎる

表 26 2016 和歌山県内中学校英語科主任向けアンケートから。英語科教員、自由記述回答欄から（17 校が回答).

結果から見える答えは明らかである。中学校の先生方の声からは、英検全員受験が、「忙しさが増えても、生徒の成長につながるから、頑張ろう。」という意気込みは到底感じられない。本来は、県から多額の受験料を受け取っている、日本英語検定協会が、試験監督や、資料の回収などを「企業努力」として支援すべきである。また、「この制度はおかしい」と実施前に教職員組合が声を大にして抗議していたにも関わらず、強行した県がもっとサポートすべきことであろう。確かに、家庭環境のせいで、受験料がなかなか捻出できない中、学習を深め、みごと合格した生徒にとって、この制度は素晴らしい制度であろう。しかし、何度も言及している通り、そのような生徒は全体から見ると少数である。県がやろうとしていることは、和歌山国体優勝に向けて、県内の中学生のスポーツテストの結果が悪いから、全員に無償で 100 メートル走のタイムを計るテストを行うといっているのと同じことである。そんなことをしたら、県民からクレームの嵐だろう。なぜ、体育では当たり前に否定されることが、英語では通用するのか？

さらにここでもう 1 点指摘しておきたいことがある。それは、テストの成績を上げるには、過去問対策をするのが一番手っ取り早いという点である。そして、対策には「ビジネスチャンス」が生まれるという点である。「学力テスト」の都道府県別の順位が悪いとやり玉に挙がった和歌山県がとった対策は、「評価問題」とよばれる過去問を各校に配布し、補習や宿題でやらせたことであった。大阪青山大学教授久田敏彦氏は、2017 年 7 月に大阪市内で行われた講演で、具体的な生活に即した問題解決の発問によって汎用的な学力を問えるといわれる世界的な学力指標の PISA テストでさえ、過去問対策が有効であることを指摘されていた。4 択のマークシートである英検であれば、真の学力なしに合格できる道をさぐる対策をたてることはもっと簡単であろう。そのような「近道指導」を、学校教育の授業で行うのは問題であることに議論の余地はない。国は、高大接続の新共通テストに関して、英語の外部検定使用をみとめる方向を打ち出している。ほんとうにいいのだろうか？もう一方のテストである「高校生のための学びの基礎診断」の試行調査は教育産業界ベネッセが一手に引き受けている。テストは廉価にするといっているが、「学びの基礎診断」に付随した「ビフォーアフター」の学習セットが用意されることは想像に難くない。日本英語検定協会も和歌山県の各中学校に対して、英検の前後に「IBT」や「4 級のスピーキングテスト」などを「販売」している。永井（2015）は、英語教育産業によって英米の教育機関が巨額の利潤をだしていることを指摘している。外部検定試験や、外部の教育産業に委託したテストを公教育にもちこむことで本当に喜ぶのはだれなのか？一歩間違えれば、「亡国」の教育政策になる危険は非常に高い。

5 中学生英語教員、保護者、生徒からの声

本節では、和歌山県母親大会の 1 分科会の討議と論者の勤務校の 1 年生に直接話を聞いた内容から英検全員受験に対する中学校英語教員、保護者、地域の人、体験した生徒の生

の声を紹介する。

論者は、2017 年 5 月に和歌山県紀の川市内で開催された第 61 回和歌山県母親大会の「話そう！子ども・学校の“リアル”」というパネルディスカッション形式の分科会にパネラーとして参加し、「中 3 生税金による英検全員受験」の実態について報告した。その際、参加していた地域の母親や中学校の英語教員から直接意見を聞くことができた。

まず、参加していた地域の母親に「この制度を知っていますか？」と聞いたところ、初めて聞いたという反応があったことに驚いた。中学生の子どもがいる場合を除き、この制度をしらない県民が多いことがうかがえた。また、中学校の英語の先生が 2 名参加していたので、英検全員受験の様子を直接聞くことができた。彼らの話をまとめたのが、以下の表 27 である。(実際聞いた話を論者が要約したものである)。

・生徒にとっては、もともとテスト漬けなので、「テストが一つ増えたか」くらいのうけとめでは？
・他のテストと英検の違いは、一人一人の合否結果が全体で明らかになること。
・教員の業務は増えた。
・生徒が 2 次試験会場に行く際には、県から保険が下りることになっている。
・生徒のために補習をすることが増えた。とくに 2 次試験対策。目の前の生徒を悲しませたくないという思いから、対策はせざるを得ない。それが結局オーバーワークにつながっている。
・学校間で英検の合格率などの公開はされていない。
・10 月の全員受験にむけて、6 月に英検を受験する生徒が増えた。
・保護者はこの制度を喜んでいる。

表 27 2017 年和歌山県母親大会分科会での中学校英語教員の談話の要約

前節で示した、和歌山県教職員組合の調べと同じく、中学校の先生方にとっては、「なぜしなければいけないのか？」が納得できない中で、それでも目の前の生徒たちを混乱させたり悲しませたくない思いのなか、「オーバーワーク」を余儀なくされていることがよく伝わった。

続いて、論者が、勤務校在籍の中 3 時代に英検 3 級を受験した 2017 年度入学のある 1 年生に聞いた話の要約が表 28 である。

・やや山間部にある中規模（1 学年 50 人くらい）の中学校出身だ。3 級を受験することは自分で選んだ。結果は 1 点差で不合格。落ちたことでショックはなかった。周りのみんなも特に嫌がっている風には見えなかった。大多数が 3 級を受験、準 2 級や 1 級を受けた生徒もいた。英検は、授業終了後の放課後に行った。僕にとっては、この制度はとてもよかった。これからも英検には挑戦してきたい。

表 28　論者勤務校 1 年生からの聞き取り(20177 月実施)

表 29 は、2 年前に全員受験を体験した、現高校 2 年生の男子生徒の声の要約である。

・都市部にある大規模（1 学年 6 クラス）の中学校出身だ。英語が苦手だった自分は 5 級を選んで受験したが、結果は不合格だった。事前に試験対策はしなかった。英語が苦手だから一人では勉強できなかった。周りの友人も「なぜ英検をうけなければいけないのか？」という声が多かった。準 2 級などを受験していた生徒はいなかったように思う。英検を落ちたことでまわりから「いじり」などはなかった。この制度が税金でおこなわれていることは知らなかった。英語が苦手な自分にとってはあまり意味のない制度だった。

表 29 は、2 年前に全員受験を体験した、現高校 2 年生の男子生徒の声の要約(20177 月実施)

二人からだけの聞き取り調査だが、英語が苦手か得意か、勉強することが好きか嫌いか、中学校の雰囲気はどうかなど様々な要因で、一人一人の生徒により英検全員受験制度に対する受け止め方も本当に様々であることが予想される。英検 5 級さえ合格できない生徒がいることを、英語教育の失敗として、中学校英語教員にだけ責任をかぶせるのは適切ではないだろう。英検全員受験や小中の「学力テスト」の弊害の一つは、行政が勝手にあてはめた「ものさし」を使って、点数や合否という「馬鹿にでもわかる指標（柳瀬、2015)」を公表することにより、教育条件の整備など行政の責任を見えにくくし、英語ができない責任を生徒個人や各英語教員、各学校などの「自己責任」に落とし込めやすくする側面であるといえる。

苦手な英語の検定試験を無理矢理受けさせられ、あげくに不合格になった生徒の様子をみていると、映画『レミゼラブル』の冒頭シーンを思い起こす。パン一切れを盗んで、囚人となったジャンバルジャンは、看守ジャベールから、名前でなく外から勝手につけられた「番号＝２４６０１」で呼ばれる。「おまえは 5 級不合格者」という「外から一方的に与えられたバッジ」は、英語の苦手な生徒に「これではいかん、もっと僕は頑張らないと」という意欲を与えるだろうか？そうは思えない。「やっぱり俺は頭が悪い」というあきらめや自己嫌悪の刷り込みにしかならないのではないだろうか。「どうせおれなんか」と「Look down」している生徒が、「予想不能な社会を主体的にたくましく生き抜くグローバル人材」に育つのだろうか？それとも、そのようなグローバル人材は、一部のエリートだけでいいのだろうか？

6 まとめと考察

6-1 はじめに

ここまで、和歌山県が税金で行っている中学 3 年生英検全員受験の実像を追ってきた。Ａ高校に入学した生徒からだけの情報であるので一概に決めるのは危険である。もしかしたら、いわゆる進学校に入学した生徒に同様のアンケートをとれば全く違う結果がでるかもしれない。しかし、Ａ高校に入学してきた県内の学力レベルで行けば中程度の生徒の声は、高額の税金を使ったこの制度が、和歌山県内の多くの生徒の英語学力や英語学習意欲の向上につながっているとは言えないことを示唆している。何より、実際の中学生の日々の学習に直接携わっている中学校の英語教員のほとんどが、この制度の意義を感じていない点に大きな問題がある。

以下は、2015 年度からこの制度をスタートさせようとしていた県教委と和歌山県教職員

組合と和歌山県高等学校教職員組合が合同でもった交渉の様子を伝える論者執筆による、2014 年 3 月発行の「分会新聞」である。

和歌山の教育を歪ませる 中3生英検3級全員受験、中高英語全教員TOEIC受験の暴挙を許すな！

県教委との交渉に行ってきました！

去る2月28日、和教組先日、教職員組合と県教委との間で、上記の件に関しての交渉があり、参加してきました。県側は池田学校指導課長以下指導主事等出席。結果は、お互い合意に至らず、局長交渉に持ち込むことになりました。当日の様子と、考えたことをお伝えしたいと思います。

まず、私が驚いたのは、全員研修が高校の教員だけではなく、中学校の教員も対象になっていた点です。もう一つは、県教委が教員ではなく「県内すべての中学生に英検３級を受験させる」というビジョンをもっている点でした。どちらもあきれてものも言えません。それと、今回の交渉では、その２点に加えて、小学校の先生向けの英語指導力上向上研修についても話し合いました。（この件は、グローバル化に対応した英語教育改革実施計画（２０１３．１２）に基づく文科省事業です。４日間１４時間で、文科省の英語教育推進リーダー研修を受けたリーダーが講師をつとめます。各小学校で一人が代表でその研修を受け、その代表の先生が自校の先生がたに研修を行うという形式です。こんな安直な研修で、小学校英語教科化、大丈夫？結局は、各先生方の努力や熱意という自己責任論に落とし込まれそう・・・）

英検3級を中三生全員に受験させる！？

勉強不足で中３生全員に英検を受けさせる話は、知りませんでした。こちらのほうが、先生全員にTOEICよりも影響は大きいし、絶対許してはいけません。県の目論見では３年の１０月を考えているようです。

「中学校３年かけて、やっと高校入試に向けて、教室で授業を受けられることができるところまで持ってきた生徒にさらなる無意味なハードルを置くのか！」「授業の一環として行うということだが、何かにつけ、授業時数確保を押し付ける県の方針と矛盾する！」「学校の外国語教育の目的は、言葉の理解、母語による思考の深化など多面的だ。英検の悉皆受験は、目的を英語運用能力に矮小化するものだ！」「１次試験は授業中にするらしいが、日曜日に行われる面接の２次試験の扱いはどうなるのか。」「合格者不合格者が、生徒間ではっきりする、それでなくても英語嫌いが増えているのに、これ以上英語に嫌悪感をもたせないで！」「全員にうけさせることにより、学校間の成績格差が明らかになる。学力テストとおなじ間違いを繰り返すのか！」「支援学校の生徒はどうするのか？」「５級でも合格できない生徒は、いる。落ちるとわかっている生徒を受けさせる教員の気持ちがわかるか！」「教員は、落ちてほしくないという思いから、授業はきっとマークシートである英検対策的な貧しい授業になる。学力テスト実施で起きた弊害と同じだ。」等、現場の教員からは怒りの声続出でした。県の説明は「生徒の受験機会を増やす」の一辺倒。それならば全員受験ではなく、受験希望者の受験料を補助するなど別でもっと有意義な方法はいくらでもあります。

授業の一環として英検を受験させる矛盾

県の説明によると、英検受験に関しては、授業時間（金曜日）を利用して各校で行う心づもりをしているようです。そこで、問題になるのは、指導要領と英検３級の難易度の不整合です。英検３級の合格レベルの語彙数は約２０００語といわれています。一方、中学校終了時点の語彙数は指導要領によると１２００語程度。英検３級が、中学３年生の到達指標として適切といえるのでしょうか？高校入試前の、貴重な授業時間を削り、県民の税金を使って全員に受けさせる効果や意義があるのでしょうか？少人数学級実現、学校の統廃合を食い止める、ICT機器の導入など、ほかにもっとお金を使うべきことはあります。様々な課題を抱える生徒と、ぶつかり、共感し合い、日々奮闘されている中学校の先生方の実態には目をくれず、成績上位者のことしか考えない、エリート育成主義と言わざるを得ません。

悉皆研修をしないと教員は研修できないと思っているのか！

続いて、TOEIC受験に関しても現場の怒りの声炸裂です。「リスニングとリーディング力しか問えないTOEICで、４技能の力がつけられるのか？」「規定の点数に届かなかった教員には、再度ペナルティ的に受験させるらしいが、本当か？（注　県はそのつもりらしいです）」「我々の自己研修力を信頼していないのか！」「なぜ、全員が受けなければならないのかが納得出来ない」「アクティブ・ラーニングを実現すべき教員が、このような、悉皆研修を受けさせられる矛盾、モチベーションが下がる！」「英語運用能力向上だけが生徒の英語力ややる気を伸ばすとわかっていれば、寝る時間を削ってでも自主研修する。しないのは、それだけでは効果がないことがわかっているからだ。」など会場のボルテージは、上がりつづけました。県の方は「この研修はTOEIC受験対策の研修ではない」「教員が研修を受ける義務は教育公務員特例法21条にある」「受けたくても忙しくてうけれない先生に受験機会を与える意味合いだ」などと答弁していました。それなら、「受けたい」と思っている先生に出張での受験を認めたり、検定料を補助すればいいだけの話です。

なぜTOEIC?

TOEIC とは、リーディング１００問リスニング１００問、合計９９０点満点でスコアがはかられる、主に、ビジネスでの英語運用能力の指標に使われるテストです。英語資格試験には、これ以外にも英検や、TOEFLなど様々あります。安倍政権は、英語教員に英語力向上を求め、各政策で具体的に検定名を上げ、各格の数値目標を示しています。まず、２０１３年の第２期教育基本計画においては、「英検準１級、TOEFL iBT８０点、TOEIC７３０点程度以上」、文科省の２０１３年「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」によると「英検準１級、TOEFLBT８０点以上」となっており、必ずしもTOEICに限定していません。聞く、書く、話す、読む、の４技能力育成面でいえば、TOEFLや英検のほうが適しています。楽天の三木谷氏等財界の意向はTOEICよりも、TOEFL重視です。そんな中、なぜ和歌山県は「時代遅れ」ともいえるTOEICにしたのでしょうか？　参考のため、各検定試験の検定料を示しておきます。　TOEFL　iBT ２万５千円強。英検準１級６９００円、TOEIC IP　４１５５円。

もし、県が、検定料を安く挙げるためだけにTOEICを選んだとしたら・・　検定試験なんてなんでもいいからとりあえずやっとけというのりなのでしょうか？和歌山はこれだけやっているという中央へのアピール作りのためと言われても反論できないでしょう。

教員の研修はどうあるべきなのか？

この交渉を体験して感じたことをまとめます。

一つ目は「教員の研修の在り方」です。教員の研修権は、１９４９年に交付・施行された教育公務員特例法第21条以下に記載されています。（この教育公務員特例法の設置に関してはGHQは反対の立場を取っていました。それでも、当時の文部省官僚が、教員の地位向上を期して、GHQにねじ込んだ経緯があるそうです（久保富三夫　兵庫民主教育研究所教師論委員会（２００６）「よくわかる教員研修　Q&A」　学文社）。

確認のためもう一度第21条を引用します。

第21条　教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養につとめなければならない。②教育公務員の任命権者は、教育公務員の研修について、それに要する施設、研修を奨励するための方途その他研修に関する計画を樹立し、その実施に努めなければならない。

教員という職業の特性上、絶えざる研修を行うことはもちろん当然のことです。しかし、研修の中身は、当人のその時のニーズ、目の前の子ども、解決すべき課題に応じて、当人自身が、決定すべきです。第２１条を法的根拠に、今回の悉皆研修を位置づけるのは、「集団的自衛権」ばりの拡大解釈です。

確認しますが、現時点で法律上、悉皆研修が定められているのは初任研といわゆる十年研のみです。**それ以外の「通称悉皆研修」の出席に関しては、職務命令はだせません。**

公教育における外国語教育の目的を矮小化するな！

2つ目は「検定試験により英語学習の目的が矮小化してしまう」点です。Can Do List にせよ、外部検定試験導入にせよ、それを設定すると、学習者はそれを「通過目標」とするよりはむしろ「最終目標」に設定するでしょう。「最終目標」が設定された学習は、そこに到達するまでは意欲が持続しますが、到達した時点で終了です。（江利川　斉藤　鳥飼　大津　（２０１４）「学校英語教育は何のため？」ｐ１１９　で　内田樹さんは鳥飼さんとの対談でこういっています。「達成目標と報奨を予め示した場合、人間は最小限の努力で目標を達成する方法を必ず考える。それが一番合理的だから」と。学問や学習の意義は「先人の文化を引き継ぎ、それを発展させ次世代につなげる」べき、高尚なものだと、私は信じたい。それでないと、人間社会の発展はありえません。自己の学習の成果を目に見える外側のメジャーで測りその結果に一喜一憂するのは、安易すぎます。

目に見えるものがすべてではない！

最近「見える化」や「可視化」などといった言葉をよく聞きます。「目に見えること」が全てなのでしょうか？「見える化」することで、「目に見えないもっと大事なこと」が、削ぎ落とされてはいないでしょうか？英検の合否やTOEICのスコアという見えるものに惑わされず、本当に子どもたち、そして私達がつけなければいけない力は何なのかを丁寧に議論する必要が今こそ、問われていると思います。

子どもたちと教員の自尊感情、自己肯定感を奪うな！

3つ目は、検定試験のもつ暴力性です。もともと人間の価値というものは、点数や一部の観点や能力で見立てるべきものでないくらい複雑で多面的なものです。それを、はっきりと「スコア」や「合否」という可視化された指標で明らかにする怖さです。合格したり良いスコアをとれた人はいいですが、そうでない人たちにとっては「俺は、ダメ人間だ」という烙印を自分から押させることになります。その子の能力は、これから以降伸びる、そして、その子がもっていないのは英語運用能力という人間の能力において極めて一面的な部分でしかないのに、そう思わせてしまうことです。権力者にとって都合の良い「庶民の身分わけ」を、カースト制度や士農工商のような外からの目に見える形でなく行うことに手を貸すことになりかねません。

和歌山県では、1月に、小学生が犠牲となった悲惨な事件が起こりました。高校をドロップアウトした青年が起こした事件でした。「グローバル人材育成」という実態がつかみにくい骨し文句に煽られて、可視的で一面的で単なる1教科の能力に過ぎない「英語運用能力の向上」にスポットをあてるよりも、学校教育においては、どんなこどもも伸びる可能性があるという前提で、ひとりひとりの子どもたちに「ここにいて大丈夫だよ」「君のかわりはいないんだよ」という事実を皆々と言い聞かして自覚させることの方がよっぽど大事で喫緊の課題だと思います。

これは英語科だけの問題ではない、教育基本法改正からはじまった権力による教育の支配の先駆的ケースだ！

この問題は、教育基本法改悪にはじまる　政治権力の教育への介入の一つのモデルケースといっていいでしょう。今回の件は、教育委員会からというよりは、もっと上の方からの指示で動いている気がしてなりません。文科省や国の方針を県が何一つ独自の見解を示さず、ストレートいやそれ以上に盛って現場におろそうとしている点で、この問題は単なる英語教育の問題ではすまされません。

今年、戦後７０年を迎えます。戦後の反省を受けて「教え子を再び戦場に送るな！」をスローガンに、教育の権力からの「不当な支配」から守ろうと戦い続けてきた先輩たちの思いを無駄にはできません。

教員の自主研修能力に誇りをもち、国家や財界のねらいをすりこませるような「スコア主義」「人材育成主義」に敢然と異を唱え、ひとりひとりのこどもによりそい、「子どもの最善の利益」を求める教員であり続けたいと思っています。この件に関しては、簡単に引き下がれません。最後まで、とことん戦いましょう！

文責　中西　毅

今のところ懸念されていた、中学校ごとの合格率を明らかにして各校の競争をあおるという最悪の事態は、県教委もしようとはしていないようだ。ただ、「学力テスト」と同様に、ある管理職が、学校の特色づけの一つとして、自分の判断で自校の合格率などを公表しはじめることは十分考えられる。もしそうなれば、授業をつぶして英検の過去問対策授業をするなど、英語教育が歪曲されることは十分懸念される。本最終節では、以下、「数値の不確かさ」「動機付け」「英語の運用能力だけを追求するあやうさ」の 3 つの論点を展開したあと、論議をまとめる。

6-2 不確かな数値の元での都道府県での無意味な競争

さて、今回、県がこのようなシステムを取ろうとしたのは、1 節で述べたように、文科省が各都道府県の生徒や英語教員の英語力を、都道府県別に公表しているためである。論者が、まず強調したいのは、そのような順位付けは本当に意味がないという点である。
以下の図 1 は、2016 年度の都道府県別の英検 3 級以上の学力をもつ、中学 3 年生の割合を調べた結果の一部である。

生徒の英語力の状況（中学校）

H28.12.1現在

		第3学年に所属している生徒数(a)	英検を受験したことがある生徒数(b)		英検3級以上を取得している生徒数(c)		英検3級以上相当の英語力を有すると思われる生徒数(d)		英検3級以上相当の英語力を有すると思われる生徒数(c+d)	
		(人)	(人)	(b/a %)	(人)	(c/a %)	(人)	(d/a %)	(人)	((c+d)/a %)
1	北海道	28,776	7,216	25.1%	3,255	11.3%	4,486	15.6%	7,741	26.9%
2	青森県	11,822	5,228	44.2%	2,317	19.6%	2,011	17.0%	4,328	36.6%
3	岩手県	11,629	5,016	43.1%	1,812	15.6%	1,879	16.2%	3,691	31.7%
4	宮城県	11,877	3,880	32.7%	1,747	14.7%	2,581	21.7%	4,328	36.4%
5	秋田県	8,405	8,154	97.0%	2,394	28.5%	728	8.7%	3,122	37.1%
6	山形県	10,407	3,914	37.6%	1,690	16.2%	1,661	16.0%	3,351	32.2%
7	福島県	18,013	6,505	36.1%	2,659	14.8%	2,946	16.4%	5,605	31.1%
8	茨城県	26,451	11,035	41.7%	5,822	22.0%	3,448	13.0%	9,270	35.0%
9	栃木県	18,115	5,955	32.9%	3,344	18.5%	2,999	16.6%	6,343	35.0%
10	群馬県	18,779	8,293	44.2%	4,427	23.6%	3,044	16.2%	7,471	39.8%
11	埼玉県	51,458	20,372	39.6%	10,552	20.5%	9,173	17.8%	19,725	38.3%
12	千葉県	43,155	17,464	40.5%	10,297	23.9%	9,524	22.1%	19,821	45.9%
13	東京都	78,662	36,370	46.2%	23,077	29.3%	13,935	17.7%	37,012	47.1%
14	神奈川県	27,105	7,074	26.1%	4,381	16.2%	5,041	18.6%	9,422	34.8%
15	新潟県	13,575	4,154	30.6%	1,901	14.0%	2,020	14.9%	3,921	28.9%
16	富山県	9,786	2,979	30.4%	1,761	18.0%	2,320	23.7%	4,081	41.7%
17	石川県	10,785	4,616	42.8%	2,592	24.0%	2,138	19.8%	4,730	43.9%
18	福井県	7,532	2,634	35.0%	1,425	18.9%	2,078	27.6%	3,503	46.5%
19	山梨県	7,543	2,340	31.0%	1,183	15.7%	1,091	14.5%	2,274	30.1%
20	長野県	19,644	6,185	31.5%	3,096	15.8%	3,001	15.3%	6,097	31.0%
21	岐阜県	19,253	5,871	30.5%	2,993	15.5%	3,939	20.5%	6,932	36.0%
22	静岡県	20,264	5,876	29.0%	3,603	17.8%	3,241	16.0%	6,844	33.8%
23	愛知県	51,055	13,645	26.7%	7,953	15.6%	7,590	14.9%	15,543	30.4%
24	三重県	16,463	4,175	25.4%	2,212	13.4%	3,297	20.0%	5,509	33.5%
25	滋賀県	13,477	5,193	38.5%	2,547	18.9%	2,448	18.2%	4,995	37.1%
26	京都府	10,525	4,415	41.9%	2,124	20.2%	1,557	14.8%	3,681	35.0%
27	大阪府	47,980	24,138	50.3%	5,802	12.1%	10,664	22.2%	16,466	34.3%
28	兵庫県	35,879	10,312	28.7%	5,506	15.3%	5,960	16.6%	11,466	32.0%
29	奈良県	11,427	2,261	19.8%	1,105	9.7%	4,375	38.3%	5,480	48.0%
30	和歌山県	8,403	8,105	96.5%	2,033	24.2%	956	11.4%	2,989	35.6%

図 1 平成 28 年度「英語教育実施状況調査の結果」について都道府県別調査結果（文科省）

図を見てもらえばわかるように、調査は、「実際英検 3 級を所有している生徒」と「英検 3 級相当の力を持っている生徒」に分かれ、最終はその和が表示されている。文科省が、このデータをどうやって収集しているかというと、公立中学校と高校に 12 月末に、文科省から各都道府県の教育委員会経由で送られてくる「公立高等学校・中等教育学校（後期課程）における英語教育実施状況調査」に基づいている。全員受験を行っていて、多くの生徒が 3 級を受験している和歌山県で「英検 3 級以上の英語力を有していると思われる生徒」が 11.4%もいるというのはどういうことなのだろうか？安全策で 5 級や 4 級を受験した生徒の数なのか？準 2 級にチャレンジして失敗した生徒の数なのか？本当は合格

する力があるが当日のコンディションで不合格になった生徒の数なのか？全員受験を実施していない高校における「準 2 級程度の英語力をもつ生徒数」は、さらに認定方法が曖昧である。進学校など定期的に模試を行っている学校ならまだしも、進学希望生徒が少ない高校では、英検準 2 級相当の力をもつ生徒の数を正確に把握するのは至難の業である。英語科教員の主観的な判断に頼るしかないであろう。

その調査には、それ以外にも「教員の授業中の英語使用は何パーセントか？」などのあいまいな質問が続く。(図 2)。図を見てもらえば、わかるように「授業の半分以上（または 75%以上）を英語で発話している」かの判断に正確性をもたせるため、いちいち先生方が、授業のビデオをとって時間を測るとは思えない。

★(3)授業における英語担当教員の英語使用状況 【教員数を入力する】

①普通科等

(ア)「コミュニケーション英語基礎」　学科を担当する英語担当教員総数　0　人

	該当する英語担当教員数	合計
発話をおおむね英語で行っている（75%程度以上～）		0
発話の半分以上を英語で行っている（50%程度以上～75%程度未満）		
発話の半分未満を英語で行っている（～50%程度未満）		

(イ)「コミュニケーション英語Ⅰ」　学科を担当する英語担当教員総数　5　人

	該当する英語担当教員数	合計
発話をおおむね英語で行っている（75%程度以上～）	1	5
発話の半分以上を英語で行っている（50%程度以上～75%程度未満）		
発話の半分未満を英語で行っている（～50%程度未満）	14 ページ　4	

図 2「公立高等学校・中等教育学校（後期課程）における英語教育実施状況調査」の一部

県教委主催の各校英語科主任の集いでは、文科省が発表したデータをもとに、担当の指導主事が「和歌山県の教員の授業での英語使用時間が向上している」「和歌山県内の高校生の英語力は相変わらず低い」などと、一喜一憂して報告している。しかし、冷静に考えれば、「あまり信頼できない数値」でつけられた都道府県順位などに煽られる必要は、まったくないのではないか？

最後に「英検全員受験」の何がおかしいかを以下の 2 つの観点で考察する。一つ目は「英検受験はすべての生徒の英語学習の動機づけになるのか」という点、もう一方は、「学校の外国語教育の目的は、英語運用能力をつけることだけなのか？」という 2 点である。節をわけて論述していきたい。

6-3　英検全員受験はすべての生徒の英語学習の動機付けになるか

和歌山県教科研究会英語部門第 2 ブロック研修会で講演された国際教育総合文化研究所所長寺島隆吉氏は、講演内で以下の点を強調している。

「ESL の環境にある日本だからこそ、英語の授業内だけでも英語で行うことに意義があるという議論があるが、逆である。これだけインターネットや情報機器が発達している今、ESL の環境にある日本でも、手を伸ばせば手に入る無料の生きた英語の教材はいくらでもある。だからこそ、学校の英語教育で大切にされるべきは動機付けである。生徒に動機さえあれば、自宅で自学自習するすべはいくらでもあるからである。」（中西要約）

寺島氏のいうとおり、今も昔も、外国語学習の極意は生徒に学習意欲や学習動機をつけることにつきる。では、生徒の動機付けをあげるにはどのようなテストやタスクが効果的なのか？英検はそんなテストになっているのか？寺島氏は『英語にとって「評価」とは何か？』や『英語にとって授業とは何か』などで二つの条件を提案している。それは、「合格するまで何度でも挑戦できるテスト」であること、もう一つは、「そのクラスで最も学力が低い生徒でもやればできる最も難しいタスク」を用意することである。以下、それぞれ論述する。

まず、前者の「何度でもチャレンジできるテスト」については、論者も寺島氏の提唱する「寺島メソッド」を授業実践に取り入れているので、その効果は実感できている。授業で「英語の歌の暗記テスト」を生徒に課しているが、定められた時期に全員一斉に行うのではなく、「できる」と思った生徒から、順に来させるようにしている。一発で合格する生徒もいるが、途中で詰まる生徒もいる。そんな生徒は、「先生ごめん、もうちょっとしてから来るわ」と、また、自分の席に戻って練習をしてから再度やってくる。そして苦労して、何回も失敗してやっと合格した生徒ほど、合格した際は満面の「どや顔」を見せてくれる。そんな瞬間は、教員にとっても生徒にとっても「癖になる」素敵な時間となる。このように、何回でも挑戦できるテストであれば、生徒は失敗を恐れず、また、不合格しても意気消沈することなくやる気を持続し、最後には合格する。合格すれば苦労した分達成感がのこり、「次も頑張ろう」という意欲につながる。もちろん、そんなタスクは、「1回ぽっきり」では意味がない。生徒たちが飽きたり、やる気をなくしたりしないように、「スモールステップ」を順序よく準備していくことこそ、教員の腕の見せ所であろう。一発勝負の英検では、不合格の生徒が落ちたままで、やる気をなくしているのは、アンケート結果をみるまでもなく、自然なことである。「3 級を合格するまで何度でも受験料を保証します」という「太っ腹」な自治体がでてくれば話が変わるが・・・。

続いて後者の「学力が低い生徒でもやればできる最難関のタスク」について述べる。このことについては、英語教育の研究者である金谷憲氏が 2017 年 5 月に行われた和歌山市内の講演で中学校卒業程度の基礎的な英語でも、形を変えて何回も高校生に学習させ、身体化することができれば、大学受験に十分対応できることを強調されていた。そして、「外部検定試験の全員受験は効果があるのか？」と質問した論者に対して、こう述べている。

「まずは生徒にぼくにもできるという自信をつけさせること。その内的動機付けはのこる。テストや短期留学といった特効薬でできる動機は短期しか効かない。教師は到達点から見下ろして生徒にロッククライミングさせるのではなく、生徒の後ろからおしてあげる支援をすべき」（中西要約）

現在、学校教育においては、目標準拠評価や授業のバックワードデザインが大流行である。英検やCAN-DOリストのように「外部から一方的に与えられた目標」を設定し、それに向かって、生徒を指導、評価することは、学校設置者からすれば「保護者や納税者に対するアカウンタビリティの確保」にはなるだろう。しかし、目標設定時に、一人一人の生徒の顔を浮かべていないことが大きな問題である。生徒一人一人に寄り添い、成長を大事に見守ろうとしてきた特別支援教育の教育評価にさえ「数値」や「エビデンス」が持ち込まれていることに危惧をいだく神戸大学の川地亜弥子氏はこう記述している。

「客観的に証明できる目標を立て、数値や行動の指標で評価することよりも、子どものねがいや期待等の内面を見取り、実践の中で目標を立て直すことが必要なのです」
（川地、2014、p84）

「中学3年生の50%に英検3級の英語力を」という目標設定で、抜けているのは、林竹二氏が著書で何回も繰り返しいっている「生命に対する畏敬の念」である。昭和の国語教育の大家、大村はま氏は、以下のような言葉を残している。

「もし、同じ材料で資料で同じ方法で勉強していればどうしても差がつくのは当たり前。それも明瞭についてしまうでしょう。ですから、材料が違い方法が違う、そういう工夫をしなければ、できるできないの世界を超えさせることはできないのではないでしょうか？」

「一人ひとりの生徒の学習ぶりを見ていて、個人個人がわかってくれば、この子にはこれをというのがどうしても出てきます。」（いずれも、大村、1986）

生徒は人間である。ものではない。一人一人違う、やる気スイッチがある場所も、英語に対する興味も、そして、一人一人の奥深くに隠れている「可能性」も。「こんな目標を与えて、こんな指導をすれば、どんな生徒もこうなるはずだ。こうならないのは、生徒の責任だ」とするのは、常に成長を続けようとする人間のＤＮＡに対する冒とくだ。
もちろん、「もっとも学力が低い生徒に対してやればできる最難関の課題」を用意するだけでは、不十分であるのはいうまでもない。Fast learnersたちを飽きさせないチャレンジ課題を用意することも、教員としてもう一つの大事な仕事である。これも寺島氏がよくいう「先頭と最後尾をつかんで引っ張れ」（寺島2002など）ば、真ん中の生徒たちも走り出す。一人一人の生徒をよくつかみ、それぞれにあったタスクを用意できることが、教員の専門性だといえる。英検全員受験は、一人一人の生徒へのまなざしに加えて、目の前の生徒の実情にあわせて、目標を変える余地さえも欠如している。
ここまで、全員同時に同レベルのテストを1回だけ一斉に課すという英検全員受験が、生徒の動機付けにはならないであろうことを、2つの観点で論述してきた。次節では、英検全員受験によって焦点化される「英語一辺倒の外国語教育」と「英語運用能力至上主義」の問題点についてのべる。

6-3　学校教育の外国語教育で英語の運用能力だけをつけるのが正しい方向か

この問題提起には 2 つの側面がある。一つは、外国語教育が英語一辺倒であるという点で、もう一つは、語学教育の目的を「使える力をつけること」だけに絞ってしまう点だ。以下、それぞれについて論者の意見を述べる。

『旅のアジア語』（佐川、2015）という本がある。日本人にはあまりなじみのない、アジア 45 カ国で使用されている 55 言語がとりあげられ、よく使われるフレーズや、簡単な文法がコンパクトに掲載されている。アジア各地の言語の文法や文字が一望でき、非常に知的好奇心がくすぐられる本である。日本で、英語以外の外国語を教えている高校がどれくらいあるか気になったので調べてみた。文部科学省の調べによると、全国に 5000 近くある高等学校の中で、英語以外の外国語を教えているのは 700 校にとどまっているそうだ。明治以降、日本は「脱亜入欧」を政策として掲げ、つねに目線を東にむけて、アメリカやその向こうにあるヨーロッパばかり見てきた。しかし、回れ右をして、西に目を向けると、シルクロード、シベリア、東南アジア。どこを回ろうが、ロシア語、中国語、アラビア語、インド諸語、インドネシア語などいくつもの非英語圏をくぐり抜けなければ、英語のふるさとイギリスにはたどりつけない。

石井(2017)は、東日本大震災の際に米軍が行った「トモダチ作戦」の本当の意味は、核戦争時、現地へどう踏み込むか、万一アメリが核先制攻撃を受けたときどう対応するかのデータ集めだったということを告発する衝撃的な本である。原発事故の放射能に苦しむ被災者がのどから手が出るほどほしい、風向きのデータや健康への影響のデータを米軍はもっている。しかし、すべてを公表することは決してなかった。しかも、風向きや放射能の測定を、一独立国である日本国内で、誰に許可をもらうまでもなく、勝手気ままに行っている。この本をよめば、どれだけ取り繕っても、日本は、日米安全保障条約のもと、アメリカの属国に過ぎないことを改めて実感させられる。堤（2017）も、被爆国である日本が、福島原発事故のあとも、原子力開発でアメリカを追随することに警鐘を鳴らしている。教育再生会議での議論や、第 2 期教育振興基本計画を受けて、小学校での英語教科化など、英語一辺倒の流れは怒濤の勢いである。英検全員受験は、この傾向をさらに強めるであろう。現に、進学校ではない、A 高校でさえ英会話教室に通った経験がある生徒が約 15%もいる。小学生低学年や幼稚園児など、小さな子どもが英検準 1 級や 1 級に合格したニュースもよく耳にするようになった。「英語ができないとグローバル人材にはなれない」という英語教育熱がさかんにあおられている。しかし、一度冷静になる必要はないか。

和歌山大学教授江利川春雄氏は、太平洋戦争中、ドイツ語とロシア語だけに固執し、英語学習を怠った戦前の日本軍の語学教育が、アメリカに対する敗戦を招いたことを指摘している。（江利川、2016）。英語の日常会話できる日本人は、アメリカのグローバル企業、特に弁護士ビジネスを広げたい法曹界にとってお大きなビジネスチャンスになることを警告する論者もいる（永井、2015）。さらに、冷戦後の「パクスアメリカーナ」は、あちらこちらからひびが入ってきている。この先、「アメリカ追従外交」「英語一辺倒の外国語教育政策」を続けて本当に大丈夫なのか。二国間の軍事同盟よりも、多国間の平和協定を結んでいる東南アジアでは戦争や紛争による犠牲者数は大幅に減っている（しんぶん赤旗日曜版、2017 年 7 月 28 日号）。今こそ、英語教育一辺倒の空気にあおられて、英検全員受

験を実施するのではなく、「アジアの中の日本」「世界の中の日本」として、冷静に、外交政策を見直し、多言語教育へ舵をとる時期ではないのか？そういう意味では生徒たちの方が「一歩先」をいっている。昨今、少女時代や BIG BANG などの K－POP の世界的流行にともない、どこのクラスにも独学でハングル文字の読み方や朝鮮語会話ができる生徒が、一人はいる。英語と比べて日本と言語間距離も地理的距離も近い朝鮮語や、日本語と同じ文字を使用している中国語、文法がわかりやすいインドネシア語などを導入することは、英語が苦手で外国語学習から遠ざかる生徒を少しは呼び止めるのでないだろうか。各都道府県も、中 3 生英検 3 級 50%などという、国が勝手にきめたものさしの背比べにはあえて参加せずに、ブラジルからの移民が多い地域ではポルトガル語、日本海側ならロシア語、和歌山なら縁のあるトルコ語など、各都道府県独自の外国語教育政策を推進して特色づけをはかる選択肢もあるのではないか。

つづいて、英検全員受験によって、「外国語学習の目的は使えるようになる実用面だけが強調される」ことへの問題点を論じる。論者が勤務する、専門高校で、生徒に英語でどんな力をつけたいかと聞けば、「英語を話せるようになりたい」という。「英語を話せるようになるとかっこいい」というのも彼らからよくきく言葉である。しかし、かれらのいう「話せる」とは、具体的にどんな話なのだろうか。たぶん、旅行先での買い物などの日常会話をイメージしているだろう。しかし、そんなレベルの会話なら、スマホのアプリで簡単にできるようになる時代がくる。

寺島隆吉氏は、先述の和歌山での講演で、以下の点も強調された。

「情報技術の進歩で、ドラえもんの秘密道具である「ほんやくこんにゃく」の実現は秒読み態勢に入ったといっていい。現に簡単な会話（BICS）程度なら、あちこちで何か国語でも翻訳機が実働している。それが完成した時、英語教育の存在意義はどうなるのか？」（中西要約）

これは、英語教員にとって実は死活問題である。生徒が「つけたい」といっている「英語力」は、スマホのアプリや接客ロボットがあれば、簡単にできる時代がもうそこまで来ている。学校で、「会話ごっこ」を教える英語教員はいらなくなる。「英語を使える力を問う」英検全員受験は、その流れからも時代遅れであるといえる。しかし、学校の外国語教育の目的は、それだけではないことは言うまでもない。

文科省の英語教育政策に警鐘を鳴らし続けるため定期的にブックレットを発表し続けている、通称 4 人組（江利川氏、斉藤氏、鳥飼氏、大津氏）の第 2 弾は、まさにこのテーマ、つまり「学校教育における外国語教育の目的論」を取り上げている。タイトルはずばり、『学校英語教育は何のため』（江利川ほか、2014）。この中で江利川氏は、英語教育の目的を端的にこうまとめている。

「学校における外国語教育の目的は、その外国語を使いこなせるようにすることだけではありません。日本語と外国語を比較して構造や発想の違いに気づかせ、ことばの面白さと深さを認識させることでもあるのです。そうすることで、母語である日本語を豊かにし、深い思考力と豊かな感性を持った人間を育てるのです」（p19）

学校で学習する、各教科に教科の専門性があることは否定しない。英語教育において、「英語運用能力の育成」は「教科の専門性」の一つであることは、まちがいない。英語の運用能力、さらには、テストの点数や英検の合否など、「目に見える専門性」で教育の成果を確認するのはたやすい。しかし、その方向性は、学校教育全体の目的を見失うことにならないか。

寺島氏は、数々の著書で(寺島、2016 など)、「テストの点数など目に見える学力よりも、「計画力」「集中力」「持続力」の３つの見えない力の方が、どの教科の学力向上につながる普遍的な学力である」ことを強調されている。目指すべきは、身につきやすいが、すぐに落ちる脆弱な「見える学力の向上」ではない。英検や大学入試、資格試験などに合格できる力は、「英語運用能力」「暗記力」などのごく狭い限定された範囲での能力の証明にしかならない、上記の江利川氏による「英語教育の目的論」にあるような、人格の完成につながる、「人生を有意義に主体的に豊かに生きていく人間としてもつべき普遍的な力」の育成こそ、学校教育の英語教育の目的としてふさわしいといえよう。発信者の意図をおもんばかって、メッセージの行間を読む深い読み取り、受け取る相手をよく観察して、どうすれば自分の伝えたい思いが効果的に相手に伝わるかを模索し続けることこそ、「言語教育の一環である外国語教育でつけるべき普遍的な力であり、すべての学びの基礎となる根本的な力」ではないだろうか。英検の合格率をあげるため、過去問対策をするのは、そのような「本当の意味での教育の実現」にとって、時間の無駄にしかならないであろう。

6-4 最後に

「税金による英検全員受験制度」は、2007 年の教育基本法改正にともない「教育計画や目的を国が定めることが可能になった」ことによる、「教育の世界ではアマチュアの行政による教育界への土足乱入」であるといえる。寺島氏は、数々の著書（寺島、2009 など）で繰り返しいっている。ここでは、高校や大学で英語で授業することが愚民化を招くことを危惧している寺島（2014）を、少し長くなるが引用する。

「A をしたいなら B の指示」。これが教育の極意だ。話す力を育てたいなら音読と作文。「英語のリズム」で音読することが聴解力と発音力を鍛え、作文力は発話力を鍛える。会話ごっこをしているかぎり永遠に高度な仕事はできない。英語による発話力を向上させたいなら作文力を磨いた方がはるかに手っ取り早い。作文力さえあれば、話すのはゆっくりであっても会話は成り立つ。むしろ文法的に誤りがなく深い内容の話ができた方が相手から尊敬される。ところが作文力は読解力で決まる。たくさん読んでいない人が達意の英文を書けるはずがないからだ。こうして再び英語教育の土台である「読解力」に戻ることになる。

国が発表した指標を、県として実現するために「中学 3 年生全員に英検を無償でうけさせる」というのは「A をしたいなら A させよ」の典型例であり、教育のプロからみれば

「これ以上ない拙案」といえよう。繰り返しになるが、英検の合格率をあげたいのであれば、生徒の動機付けをあげるという B を考えればいいのである。英検全員受験がうまくいっていないのは、行政側がトップダウンで教育改革をしようとしても、日々、直接生徒とかかわっている現場の教員の声をきかないと、真の教育改革はなしえない例としていいのではないだろうか。

話はすこし変わるが、文科省や各都道府県教育委員会があれほど作成しろとうるさくいっていた CAN-DO リストの作成は、次期指導要領に記載されない可能性が出てきた（鳥飼など 2017）。そして、日本学術会議言語・文学委員会および文化の邂逅と言語分科会は、、1989 年の学習指導要領改訂以降の読解重視から重要重視への転換が図られている英語教育は「英語をコミュニケーションの道具」として教える方向であることに疑問を呈し、2016 年、「ことばに対する能動的態度を育てる取り組み」を、中央教育審議会に提言した。以下は、その一部である。

「学校で、ことばに対する能動的な態度を育み、ことばの持つ仕組みへの興味を喚起し、そして、ことばを発するプロセスの意識化を醸成することができれば、将来、児童・生徒自身が英語や他の外国語を必要とするようになったとき、自分たちにとって必要とされる種類の英語、あるいは必要とされる別の言語を、必要とされる程度に習得することが可能になる。」（下線は中西）

「中学 3 年生で英検 3 級」などと、学習者ではない他人が目標を決めることに対して大きな疑問を投げかけているといっていい。風向きは変わりつつある。外部検定試験導入にせよ、CAN-DO リストにせよ、「学習者の外から目標を与える」指導と評価は、再考する時期にきているのではないか。いつまでも国の「グローバル人材＝英語運用能力を持つ人間」という方向性に追随し、他都道府県との競争にのりだすことを続けていけば、それこそ和歌山県は、本当に「出遅れ」てしまうのではないか？

最後に、論者が授業を担当しているある生徒のエピソードを述べることで、本論を閉じたい。彼は、3 年生になって初めて授業を担当することになった機械科の男子生徒だ。私は、授業で、「日本語の自由エッセイ」というタスクを課している。彼が、タスクとして持ってきたのは、中間テスト時は、自分で調べた「海賊」というタイトルの日本語のエッセイと、それを英訳したものそれぞれ原稿用紙 4 枚、期末テスト時には、”Propaganda”というタイトルで日本語 10 枚、英文 12 枚のエッセイを書き上げた。聞くと彼は、英語やドイツ語が好きで独習しているそうだ。そんな彼が、2～3 年生時には、週 2 単位しか英語の授業のない学習環境である本校で、英検 2 級を合格した。快挙である。点数の内訳をみると、最近 2 級に加わった writing の部分が満点であり、それが合格につながっていた。自律学習者の育成、それを支える学習意欲の向上こそが学校教育の目的であるということを、彼は私に再認識させてくれた。

本論は、テストや検定試験は、英語が苦手な生徒、得意な生徒、例外なくすべての生徒にとって有効な動機付けにはならないことを指摘してきたつもりだ。もし、県が特色付けとして自県の中学生の英語力をあげたいなら、まずすべきことがある。勤務時間が過労死ラインの月 100 時間を超える中学校教員が 80%を超えるという報道

（https://news.yahoo.co.jp/byline/ryouchida/20170428-00070371/など）もある。大学の教育学部で、教員養成に取り組むある教授は、自虐的にこう語っている。「普通の一般会社に就職しようとする生徒には、「ブラック企業」に入らないように気をつけるように指導している。一方で、大学の進路実績をあげるため、超ブラック企業である学校の教員になる生徒を増やさないといけないことに、大きな自己矛盾を感じている。」と。生徒の動機付けをあげるには、教員が余裕とゆとりをもって一人一人の生徒をみる時間、生徒の意欲を向上するような授業プランをたてられる研修時間や機会を確保すること、そして、一人一人の生徒に目と声が届く少人数学級の実現や教員の配置増をすることである。そのためには、まずは、ブラック並の教員の勤務実態を解消すること。その整備をしないかぎり、県内中 3 生の英検 3 級合格者の割合を格段にアップさせ、「国からの覚えをめでたくする」A の実現は、不可能である。

付記、本論文の完成にあたっては、生徒向けのアンケート調査に協力してくださったA高校の英語科の先生方、貴重な中学校の先生方の声を教えてくださった和歌山県教職員組合のみなさん、また、多忙の中、論文のチェックを快く引き受けてくださった寺島先生はじめ寺島先生が主宰する国際教育総合文化研究所の「研究仲間」のみなさん、和歌山大学の江利川先生はじめ新英検和歌山支部のみなさんの協力なしには、完成できませんでした。本当にありがとうございました。

おもな参考引用文献

石井康敬（2017）『フクシマは核戦争の訓練場にされた－東日本大震災「トモダチ作戦」の
真実と 5 年後のいま』旬報社
内田樹（2008）『街場の教育論』ミシマ社
内田樹（2009）『日本辺境論』新潮新書
内田樹（2011）『最終講義－生き延びるための六講－』技術評論社
内田樹、鳥飼玖美子(2015)「悲しき英語教育」、江利川春雄、斎藤兆史、鳥飼玖美子、大津由紀雄『学校英語教育は何のため？』ひつじ書房
江利川春雄（2015）『英語教科書は＜戦争＞をどう教えてきたか』研究社
江利川春雄（2016）『英語と日本軍－知られざる外国語教育史』NHK 出版
江利川春雄、斎藤兆史、鳥飼玖美子、大津由紀雄（2014）『学校英語教育は何のため？』ひ
つじ書房
大津由紀雄、江利川春雄、斎藤兆史、鳥飼玖美子（2013）『英語教育、迫り来る破綻』ひつじ書房
大村はま（1986）『教室を生き生きと』筑摩書房
川地亜弥子（2014）「子どもと教師のダイナミックな発達を促す教育評価とは　教育評価論の現代的課題」三木裕和、越野和之、障害児教育の教育目標・教育評価研究会編『障害のある子どもの教育目標・教育評価研究会　重症児を中心に』クリエイツかもがわ
斎藤兆史、鳥飼玖美子、大津由紀雄、江利川春雄、野村昌司（2016）『「グローバル人材育

成」の英語教育を問う』ひつじ書房
佐川年秀（2015）『改訂版　旅のアジア語』株式会社 KADOKAWA
施光恒（2015）『英語化は愚民化　日本の国力が地に落ちる』集英社新書
堤未果（2017）『核大国ニッポン』小学館
寺沢拓敬（2014）『「なんで英語やるの？」の戦後史－＜国民教育＞としての英語、その伝統の成立過程』
寺島隆吉（1989）『英語にとって授業とは何か』三友社出版
寺島隆吉（1991）『シリーズ授業の工夫１　英語記号付け入門①英語記号付け入門　その誕生と現在の到達点』三友社出版
寺島隆吉（2002）『英語にとって「評価」とは何か？』あすなろ社
寺島隆吉（2009）『英語教育が亡びるとき－「英語で授業」のイデオロギー－』明石出版
寺島隆吉（2014）「英語で授業」が進行させる「一億総白痴化」、『新潮 45』2014 年 9 月号
寺島隆吉（2015）『英語で大学が亡びるとき－「英語力＝グローバル人材」というイデオロギー』明石出版
寺島隆吉監修山田昇司編著（2016）『寺島メソッド　英語アクティブ・ラーニング』明石出版
永井忠孝（2015）『英語の害毒』新潮新書
中西毅（2017a）「第 2 ブロック研修報告」『和歌山県高等学校教育研究会英語部会 2016 年度会誌』
中西毅（2017b）「工業高校英語教育における効果的な評価方法の模索」『国際教育総合文化研究所紀要』第 3 号　http://ieas.web.fc2.com/BulletinOfInstitute.html
Nakanishi Takeshi(2015) “Three Approaches for Active Learning-Based on the Concept of Interactive Assessments”　和歌山大学大学院教育学研究科 2015 年度提出修士論文
日本学術会議言語・文化委員会、文化の邂逅と言語分科会（2016）「提言　ことばに対する能動的態度を育てる取り組み　初等中等教育における英語教育の発展のために』
灰谷健次郎、林竹二（1979）『教えることと学ぶこと』小学館
林竹二（1983）『教育亡国』筑摩書房
久田敏彦（2014）「授業における教師の専門性」小柳和喜雄、久田敏彦、湯浅恭正『新教師論　学校の現代的課題に挑む教師力とは何か』ミネルヴァ書房
柳瀬陽介（2015）「どうする日本の英語教育第 16 回　リスト化、数値化の危険性」『新英語教育』2015 年 7 月号
山田昇司(2017)　「放送大学・面接授業で「何を」「どう」教えるか－19 歳から 91 歳までの英語「再出発」」、第 47 回中部地区英語教育学会長野大会発表資料
しんぶん赤旗日曜版 2017 年 7 月 28 日号
「英検 IBA」
https://www.eiken.or.jp/eiken-iba/　（2017 年 7 月 26 日検索）

「第 2 期教育振興基本計画（本文）」
http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/__icsFiles/afieldfile/2013/06/14/1336379_02_1.pdf
（2017 年 7 月 19 日検索）
「文部科学省高大接続改革の実施方針等の策定について（平成 29 年 7 月 13 日）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/07/1388131.htm
（2017 年 7 月 26 日検索）
「文部科学省平成 28 年度「英語教育実施状況調査の結果」について都道府県別調査結果」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2017/04/07/1384236_09.pdf
（2017 年 7 月 19 日検索）
「和歌山県英語教育改善プラン」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1371435_10.pdf
（2017 年 7 月 19 日検索）
「和歌山県議会議員片桐あきひろ議会一般質問平成 28 年度 2 月定例会質疑[予算委員会]質疑内容」
http://www.katagiri-akihiro.net/act/shitsumon/2016/0310_shitsumon-03.html
（2017 年 7 月 19 日検索）
「和歌山県教育委員会学校指導課国際人育成プロジェクト」
http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/500200/kokusaijin/
（2017 年 7 月 19 日検索）
「和歌山県平成 24 年度当初予算 3 歳出款 1０教育費」
http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/010400/yosan/h24tousho/documents/24TO_s_1_3_10.pdf
（2017 年 7 月 19 日検索）
「和歌山県国際人育成プロジェクト事業に係る 平成２９年度中学 3 年生外部検定試験」実施要領
http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/500200/kokusaijin/pdf/29eiken.pdf
（2017 年 7 月 19 日検索）
「和歌山県国際人育成プロジェクトに係る中学校英語科教材について」
http://www.wakayama-edc.big-u.jp/jh_gaikokugo/project1.pdf
（2017 年 7 月 19 日検索）